



Title	ジュネーブ生活の思い出
Author(s)	藤井, 由希
Citation	目で見るWHO. 2012, 50, p. 10-11
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/86735
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka



ジュネーブ生活の思い出

公益財団法人 ライオン歯科衛生研究所 藤 井 由 希



Yuki FUJII

1963年 大阪府生まれ
1988年 大阪歯科大学歯学部卒業
歯科医師免許取得
1993年 大阪歯科大学 大学院
歯学研究科修了 博士(歯学)取得
1994年 WHO本部 口腔保健部 短期講師
として赴任
大阪歯科大学口腔衛生学講座
講師(非常勤)
1995年 (財)ライオン歯科衛生研究所
歯科医師
現在に至る

1994年の3月から1995年の3月までの期間、大阪歯科大学大学院で口腔衛生学を専攻・修了した私は主任教授の推薦でWHO本部の oral health programme に短期コンサルタントとして滞在していました。当時は Dr. David Barmes が責任者でしたが、彼と2-3回会ったことがあっただけで、他に知人はおらず、初めてジュネーブ空港に着いたときは心臓の強い私もさすがに不安でした。



WHO 正面玄関にて

チューリッヒ経由でジュネーブ空港に着いたのは夜9時ごろだったでしょうか。タクシーで Dr.Barmes の秘書が予約しておいてくれた Cite universitaire という

誰でも使える学生寮のような宿泊施設に向かいました。ジュネーブは国際機関がいくつもあり、外国人の就労者も多く、その当方で5人中3人は(スイス人ではない)外国人という人口構成でした。Cite は国際機関に短期間関わる人たちもよく使う清潔で安価な施設で、夜も遅い時間だったにもかかわらず、受付には何人か人がいて明るくてほっとしたことを覚えています。着いたのが金曜日の夜、次の土曜日は簡単な食事をしてずっと部屋にいました。日曜日、さすがに買い物に行って何か食べなくちゃと思ったのですが、驚くべきことにスーパーマーケットをはじめとしてお店はほとんどお休み。日曜日には働かないのがヨーロッパの常識なのでした。しかたなく入ったマクドナルドは日本のものと同じメニュー、同じ味で、最初のノスタルジーに浸りました。ちっとも日本的なものではないのに今思い返すとおかしくなります。

ジュネーブは国際都市。スイス人より外国人のほうが多いのは前述のとおりですが、意外に街で使われているのはフランス語オンリー。「English in the office, French in the street」と同僚が言った通り、WHOでの公用語は英語ですが、街では買い物もフランス語と片言の英語を使う人が多く、よこんで英語を使うのは若い大学生タイプの人たち位でした。少し生活に慣れてくるとスーパー以外に街の広場で毎土曜日に開かれるマルシェ(市場)で新鮮な野菜やチーズ、肉製品をかうのが土曜日の日課になりました。同じ Cite でできた日本人の友人と一緒に土曜日のショッピング。慣れてくると片言でもフランス語を使って市場のおじさんと笑顔を交わせるようになります。最初の数週間は家に帰っても一人で孤独な生活でしたが、買い物して料理する、そして食べる、ということが続け、だんだんジュネーブに馴染んできたような気がします。小さいころから料理を仕込んでくれた母にあの時は本当に助けてもらった気がします。

職場でも街でも日本人と会うとやっぱりほっとします。特にWHO内で日本人同士が協力して助け合うのは当然、というありがたい雰囲気があり、特に女性一人で知人がほとんどいない私は仕事以外でもいろいろな集まりにお誘いがありました。ジュネーブのお付き合いは基

本、自宅でのホームパーティです。楽しかったのはいろいろな文化や国籍、言語の人たちが混じったパーティになるということです。ただ私は英語なら大体話についていくことができたのですが、たとえばフランス人が混じっていると会話はフランス語になりがち。まったく理解できないスペイン語中心の夕食会に夜中まで付き合ったこともあります。Cite を出て自分のアパートマンを9か月の間借りることにしたのも、自分も家で友人を招きたいと思ったことが一番の理由だったかもしれません。

日本人の同僚や友人と家から送ってもらったそうめんをゆでて食べたり、お正月に日本食品店で少し贅沢だと思いつつ、海老や高野豆腐、インゲンなどの炊き合わせや白みその雑煮を料理したり、それもとても楽しい思い出でした。他国の友人たちと囲む夕食にはまたそれと違った楽しさがありました。偶然ですが、同じ Oral Health で私と同じ年ごろ、同じ職種の女性がそのとき3人いました。フィンランド人の Annemari、日系ペルー人の Ana、そしてインド人の Samira。4人でいると「オオ、君たちは4大陸を表しているようだね」と言われたこともあります。仲良くなると Samira が私のホームパーティで北インドのカレーを作ってくれたことや、Annemari に予防歯科の本場を見たいとヘルシンキ大学に連れて行ってもらい、実家に一緒に泊まらせてもらったお礼にお好み焼きを作って、ぜひレシピが欲しいといわれたことなど、思い出はつきません。そこであたりまえだけど大切なこと、人種や育った環境は違っても人間はそれほど変わらないし、信頼しあうことができるということを学びました。



WHO のベランダから見たレマン湖の大噴水

WHOの Oral Health Programme の活動としては1994年にWHOの口腔保健年として「Oral health for healthy life」というタイトルで世界的なキャンペーンを行い、夏には東京で歯科保健に関する国際会議が開かれ、厚生労働省・日本歯科医師会が共同で作った8020(80歳で20本の歯を保とう)というスローガンが初めて大きく取り上げられました。また、全身健康との関わりという視点で(先進的なものだったことが現在わかります)この年からOral healthは Non-communicable disease(非感染症)の部門の一つに位置づけが変わったことも私が滞在した1年の間に起こったことです。



オールドタウンで見たトラム型バス

最後に2年前に休暇を利用して夫とジュネーブを再訪してきました。長いこと会えなかった友人と旧交を温め、WHOからのジュネーブ市街を見晴らす素晴らしい景色を再度見ることができ、また久しぶりにグリユエールを使ったチーズフォンデュを食べながら、懐かしい時を過ごしました。緑が多く、レマン湖を見ながらのんびり歩くには最適の街です。観光にはオールドタウンと呼ばれる古い建物が集まった丘があり、今回日本語のオーディオガイドを借りて散策してみたら、意外な有名人の旧家があることを知りました。スイス観光の中継点として利用されることが多い街ですが、もし機会があれば街歩きやレマン湖の大噴水の景観、そして清浄な空気を期待して、ジュネーブ観光を楽しめることをお勧めします。